

障害のある奏者のオーケストラ参加

——医療・福祉従事者の関与しない環境に着目して——

正井 佐知

障害者の社会参加の場には、介助方法や対人援助方法など何らかの医学的・福祉的専門知識を有する者が参加していることが多い。このような場に関する研究は今までに多く蓄積されてきた。本稿では、医療や福祉の従事者が関与せず、支援を目的としない場に、障害のある人がどのように参加しているのかを明らかにする。医療や福祉の従事者が関与しない場として、20年間障害のある奏者が参加しているオーケストラαの合奏練習に着目した。そして、楽譜トラブルに関する相互行為の形式的分析と知識基盤の分析を行った。この結果、障害のある奏者の参加を確保するために集団的に団員たちが用いている実践的ルーティーンの詳細が明らかとなった。

1 はじめに

1-1 障害者の社会参加と援助

1976年の国際障害者年で「完全参加と平等」がテーマとされて以来、障害者の社会参加の促進は世界的な潮流となっている。日本においても障害者基本法や障害者総合支援法を含む様々な法律が障害者の社会参加を法の趣旨としている。社会参加には多様な場面が想定されるが、実際は、法的に保障の対象となる教育や就労という文脈で語られることが多い。こうした場は二つの特徴がある。第一に、医療・福祉の場に従事する者が援助を行うという特徴である。医療・福祉従事者に多い介護福祉士、社会福祉士、ピアカウンセラー、看護師、教師は、望ましいとされる福祉的理念や支援方法について座学的な専門知識を学んでいる。第二に、このような社会参加の場は、学校、病院、職場、施設、自宅どこであっても援助という目的を含む場が設定されているという特徴がある。この二つのうち少なくとも一つの特徴を備えた環境での活動が論点となっている。

その活動が、法的な保障の対象とならない地域活動や余暇活動においては医療・福祉従事者による参加支援が少ないことが問題視されている。例えば、平成23年度に行われた「障害者の社会参加活動の支援に関する調査」では、障害者・家族へのアンケート調査、余暇活動実施団体と自治体に対するヒアリング調査、事例調査から、余暇活動の実施団体のほとんどが障害福祉事業を行う法人であること、そもそも実施団体数自体が少ない現状が指摘されている。また、杉野(2009)は、東京都稲城市における青年学級を調査し、支援者、ボランティアスタッフの不足解消が重要課題であると指摘している。支援者の一例としてはケースワーカーが紹介されている。ボランティアスタッフは、教育・研修を受けることを前提とし、「障害への理解は不可欠であり、福祉の支援の視点からの」スタッフ育成が目指されている(杉野2009: 69)。

しかし、医療・福祉従事者や特別に研修を受けたスタッフが関与しなければ、障害者の参加は困難になるのだろうか。本稿では、医療・福祉従事者が関与しない場に参加している障害者

の事例に着目する。

このような事例を扱う理由は二点ある。第一に障害のある人が支援を受けられない環境に置かれる機会は多くあるにもかかわらず、このような環境への参加可能性について詳細に分析した研究は見当たらない。したがって、医療・福祉従事者が関与しない環境に障害者が実際にどのように参加しているかを明らかにすること自体に意味があると考えられる。第二に医療・福祉従事者が関与しない場の研究は、医療・福祉関係者や専門職にとっても有用であるという理由である。専門家は専門知識や技術をベースに集団を形成している。Freidson (1970=1992) が述べたように高度な専門性は専門家と非専門家の知識と地位の非対称性を生みパターンリズムに繋がると批判され、長年の課題となっている。専門化が進む医療・福祉専門職はパターンリズムに陥らないようにクライアントを尊重することがまた行動規範となっている⁽¹⁾。例えば、医療者向けの古典的教科書では、生命倫理の4原則が提唱されている⁽²⁾。また、社会福祉士、精神保健福祉士といったソーシャルワーカーが学ぶバイステックの7原則は、援助者として望ましい行動規範を伝えている⁽³⁾。医療・福祉従事者が関与しない環境の分析は、こうした専門家が抱えるジレンマに示唆を与えうる。

本稿では、持続的、安定的、実践的であるという認定に十分な20年間、専門家、医療・福祉従事者の支援なしに障害者が参加しているオーケストラの活動に焦点を当てる。そして、メンバーがどのようにその場に参加しているかを明らかにする。

1-2 オーケストラへの参加

まず、オーケストラという活動への参加にはどのような特徴があるかを記述する。第一に、オーケストラは集団でクラシック音楽を演奏

する。ここでは、即興が排除され、楽譜の指示通りの演奏が要求される。指揮者でチェリストのHarnoncourtによれば、初期バロック音楽の時代は、演奏者がいかに即興的に音楽を装飾するかが重要視された。しかし、19世紀、20世紀の作曲家は、演奏者の自由な意思を出来るだけ抑えるために、自らの意図をその細部に至るまで可能な限り固定しようと試みた。現代では演奏家が演奏すべき楽譜には、全ての音符が正確に記されていないとされない(Harnoncourt 1983=2006: 40)。「作品に忠実である」という理念は、この50年で規範にまで高められたという(Harnoncourt 1983=2006: 34)。クラシック音楽は楽譜の再現性を厳格に要求し独自の創造の余地が少ないという性質上、ジャズなどの分野に比べて障害者の参加を阻むとされる(Lubert 2012)。第二に、演奏以外の行動を含めオーケストラは多人数で同じことを同時に行うことが要求される。ボウイングや譜めくりの適切なタイミングなど演奏中の身体的同調性はもちろん、合奏練習においても同時性が求められる。すなわち、合奏練習にも指揮者の指示に従うこと、楽譜を用意すること、同時に弾き始めることが好まれたり求められたりする。

以上のようなオーケストラの協調性・同調性は、障害者の活動への参加を困難にする重大な特性である。ゆえに、オーケストラの練習場面を研究対象とすることで、特定の条件の下で障害のある人が社会的相互行為に参加するための示唆が得られるだろう。なお、本稿では、音組織や音楽理論への言及無しにプラクティカルに練習場面の分析を行う。

2 本稿の位置づけと枠組み

本稿では、集団の参加を相互行為的に分析するために、エスノメソドロジーを用いる。Garfinkel (1967) によって提唱されたエスノメソドロジーは、人びとの方法を探求する点に特徴がある。すなわち、その場を秩序だったものとして維持するために人びとが行っている方法の解明を行う。エスノメソドロジーの視座からの障害研究には、言葉を持たないとされる二人の少女について研究した Goode の文献がある (Goode 1990, 1994)。彼は、2名の少女のフィールドワークをおこなった。そのうちの一人であるビアンカは学校や専門家からは、先天的盲ろうでもっとも重度の障害があり言葉を一切持たないとされた。彼らが前提にしているのは、科学的基準による測定結果である。その中で、Goode は、家族がビアンカの発する「言葉」を理解しコミュニケーションを行っていると報告している。家族、特に母親は、ビアンカが「彼女に何でも話す」と主張していた。しかし、専門家たちは科学的・専門的見地から母親を「妄想的」で「混乱している」と見ていた (Goode 1990: 8, 1994: 55-7)。Goode によると、家族たちは、彼らのコミュニケーション実践において、いかなる専門職的観念や理論をも用いていなかった。しかし、Goode は分析の結果、専門家には常同行動とされる行為が、意味を成す行為として構成されているし、家族がビアンカとコミュニケーションできているとしている。家族は実践的知識を用いてビアンカとのコミュニケーションを可能にしている。この方法は、状況に埋め込まれた家族、日常のルーティーン、家具や部屋の配置、時間などによって成立する。Goode の研究は、十分に長い年月相互行為が継続する場合には、障害者の相互行為参加を可能にする非専門家の方法が生じうる

ことを示している。

本稿では、視覚障害があり、日常的コミュニケーションにも障害がある演奏者がどのようにオーケストラ演奏に参加できているかを明らかにする。この奏者の参加が長期にわたっていること、演奏が十分に優れていることは本事例の特色である。しかし、これらの条件のみでは長期の参加を達成することは困難である。なぜなら、オーケストラのメンバーは交代するし、集団的行為への参加は音を出すという演奏のみならず、練習その他の活動全般の参加を含むからである。そこで、本稿では、Goode もいうような外的な科学的・専門的知識には基づかない、人びとの実践的知識を分析する。現状を維持したり改革したりすることを試みるにはまずどのような活動が行われているか自体を分析し、社会を構成する基礎部分である実際の合意プロセスや原理・原則を知ることが必要であると考えられる。

3 データ：オーケストラ α と奏者 Y

本稿では、オーケストラ α を対象とする。オーケストラ α は、1990年代に関西で設立されたアマチュアオーケストラである。月に二回の練習を行っている。退団手続きが無いため、団員の人数を問うと誰も返答できない。退団手続きがない理由は、「来るもの拒まず去る者追わず」という団長の方針もあり退団申告の心理的負担を軽減するためとのこと説明がなされる。毎回は参加できない人に対応するため団費は月額制となっている。何年も練習に来ていない団員が出張の折などに突然参加することもある。

当団体の特徴は、視覚障害、身体障害、発達障害、精神障害、知的障害のある団員が演奏者や指揮者として在団していることである。障害の有無を申告する必要もないため障害者が何名

所属しているかは不明である。周囲の団員に口頭で援助を求めることがあるのは2、3名である。しかし、当団体は障害者の社会参加支援を目的として掲げているわけでもなく、HP上で障害のある奏者を募集しているわけでもない。オーケストラαではどの団員にどのような障害があるかについても話題にならないし、望ましい支援のあり方などについて話し合う機会もない。また、多くの団員は偶然入団したところ障害のある団員が参加していたため接点を持つようになったが、入団前はそのような経験がなかった⁽⁴⁾。それにもかかわらず障害者が参加しやすいという情報が広まり入団希望者本人もしくはその保護者がアクセスして入団することが多い。

Yは、オーケストラαに入団して20年以上、ほとんど欠席することなく演奏活動を継続している。Yは発達障害と視覚障害のあるセカンドバイオリンパートの団員である⁽⁵⁾。本稿では、Yと他の団員との相互行為を分析することで、専門家の援助なしに障害者がいかにして共同行為に参加しているかを明らかにする。

オーケストラαでは、2013年1月から2017年2月現在まで筆者自身も演奏者として参与観察を行った。また、2014年7月から2015年12月まで練習場面を計12日、30時間にわたり撮影、録音した。

4 分析

4-1 練習の流れ

練習は、以下のような順で進行することが多い。

チューニング→練習（曲名のアナウンス⇒楽譜の準備⇒合奏開始のアナウンス⇒合奏⇒指摘⇒合奏⇒指摘⇒合奏⇒次の曲名のアナウンス）→休憩→チューニング→練習→休憩→チューニ

ング→練習→解散

Yと周辺の奏者との相互行為が繰り返し観察されるのは、楽譜の準備、合奏開始時、終了・解散のときである。本稿では、楽譜に関するトラブルの場面に焦点を当てる。Yは、「間違っただ」楽譜を置いていることが多く、その知識はメンバーで共有されている。楽譜トラブルでは、多くの団員が相互行為に参加する。

4-2 確認連鎖

合奏練習の中で、練習する曲を変えるときに合奏を開始するときには指揮者がアナウンスを行う。このとき、Yが指揮者に対して確認を行うことがあるということがメンバーの知識として共有されている。Yが知覚したトラブルを自分で確認する二場面を取り上げる。

断片1は、指揮者が練習する曲を変えることを決め、演奏者が楽譜を準備する場面である。01行目で、C2は練習する曲を変えることを宣言し、「さんぽ」という曲名を指示しようとする。C2が曲名を言いかけている途中で、Yは曲名を問う（2行目）。Yの発話は、C2の発言が進行中であるのに質問している点に不適切性がある。Yは過剰な確認を求めているとも解釈できる。3行目でのC2の返答には次の特徴が見られる。第一に、質問自体の正当性を疑わない。第二にC2は曲名を言いかけていたとみられるが、未定であると返答し、その後「さんぽかな」と不確定的な要素を含ませつつ回答している。したがって、3行目ではYの体面を保つための配慮がなされているという解釈ができる。その後改めて「さんぽいきま：す」とYを含めた全団員に向けて発話している。3行目では楽譜を探しながら発話が行われ、楽譜を取り出した後に「さんぽ」であると回答している。4行目ではYが聞き返して修正を求めており、C2の発話が聞き取れなかったことがわ

表 1: 【断片 1】 C2 は指揮者、Y は第二バイオリン奏者 (6)(7)

01	C2:	はい (.) 次の曲いきま:す. さんー [さん
02	Y:	[え何の曲ですか
03	C2:	はい, ちょっと待ってくださいね僕も決めてないや. え, さんぽかな? さーさんぽいきま:す
04	Y:	え?
05	C2:	さんぽ.
06	Y:	さんぽですね, [はい]
07	C2:	[はい]

かる。5 行目で C2 が返答した後、Y は 6 行目で 2 回目の確認を行っている。

断片 2 は、一曲を通して合奏後に C2 が注意点を指摘し、該当部分だけを練習しようとする場面である。人物の位置関係は図 4 のとおりである。

指揮者 C2 は、楽譜の練習番号 B からの合奏開始を宣言する (1 行目)。2 行目で Y 以外の全員が楽器を構える。しかし、Y だけは顔を譜面に接近させて練習番号を探しはじめ、3 行目で確認の発話をしている。これに応答し、4 行目では C2 が指示の発話を再度行っている。この間、Y 以外の全員が楽器を構えて待っている。Y も指揮棒を上げ始める。Y は、楽譜を見たまま 7 行目で「D ですか」再度確認の発話をし、まだ練習番号 B が見つからないことが分かる。

この「D」という言葉が聞こえ、C2 は、図 1 のように構えかけていた指揮棒の先端を口元に付ける。そして、Y への応答は 9 行目 12 行目 14 行目と「B」で始まる英単語を列挙するという長いものになっている。聞き間違いやすい練習記号を英単語を用いて伝えることはオーケストラであればよく行われ、オーケストラ α でも合奏開始指示のバリエーションの一つとして共通理解されている。Y の長い発言の中では次の二つの動きが起きている。最初に、C2 が指揮棒を上げていないし合奏が始まりそうになるので団員が構えていた楽器を下ろし始めた。

これを見て C2 も口元にあてていた指揮棒を下ろした。二つ目に、Y の両隣の Va と Vn1-2 が楽器を下ろし終わり、Y の楽譜を確認する。そして、Va2 は楽譜の該当部分を弓先で指し示している。

Va2 が指し示したことによって問題の解決可能性が示される。この様子を見て C2 の発言は終了している。このタイミングのよい終了により、会話が英単語の列挙によって引き伸ばされていたことが分かる。

C2 は指揮者であり指示したり合奏開始を決めたりとその場を取り仕切る権利を有している。2 行目から 7 行目では皆が楽器を構えて指揮者の開始の合図を待つ状況で Y だけ異なる動きをしている。C2 は、7 行目の Y の発話前までは指揮棒を上げかけている途中だった。頸部辺りまで指揮棒が上がっていたが、7 行目の Y の発話を聞いて手の動きを口の方に方向転換し、指揮棒を動かすという動きが指揮棒を構えるための動作ではなかったかのように振る舞っている。ここでも、断片 1 で見たような Y の体面を保つための配慮が起きている。また、説明を引き延ばすことで Y が困っていることを取り上げ、サポートの必要性を基礎づけ周囲の人がサポートをするよう働きかけている。

表 2: 【断片 2】 C2 は指揮者、Vn1-2 は第一バイオリン奏者、Y はバイオリン奏者、Va2 はビ
オラ奏者⁽⁸⁾

01	C2:	Bから行きます
02	Y以外:	((楽器を構える))
03	Y:	Bからです [か
04	C2:	[Bから [行きます
05	Y	[はい
06		(1.0)
07	Y:	え, D [ですか
08	C2:	[((構えかけた指揮棒を口元に持ってゆく))
09	C2:	べ: です (.) え: : と, お: : : [え: : とブリテン, パーンスタインの B, =
10	Y:	[僕のバイオリン B 載ってませ [ん
11	Va2:	[((Y の楽譜を見る))
12	C2:	= [え: : なんて言ったらいいんでしょうか, =
13	Y以外	[((構えていた楽器を下ろす動きが全体的に起き、C2 も指揮棒を下ろす))
14	C2	= ベイ [スターズの B. え: あと何がありますか
15	Va2:	[((立ち上がって弓先で楽譜を指し示す))
16	Vn1-2:	[((Y の楽譜を見ながら))A, B
17	Y:	あ, わかりました. イーウィ (.) ウィー E ですね
18	C2:	[B です. ビ (.) ビー. B です
19	Vn1-2:	B, [大丈夫?
20	Va2:	[((再び弓先で楽譜を指し示しながら)) ここや. ごめん, こっち=
21	C2:	= B, B
22	Y:	D ですね. あ (.) わかりました. [() 休みのとこですね
23	C2:	[はい, ° ん: ° D に聞こえるけど大丈夫かな. はい
24	Vn1-2	((立ち上がって Y の楽譜を見る))
25	C2:	オプションでドから始まる場所です
26	Y:	はいはい [はいはい.
27	C2:	[はいはいはいはい



図 1: 指揮棒の位置

しかし、17 行目の Y の発言によって問題が解決していない可能性が示される。「イーウィ (.) ウィー E」は独特のリズムで発話されている。この直後の「ビ (.) ビー. B」は、7 行

目の Y の発話と類似したリズムでなされている。ここで C2 は不明瞭な発話の代わりに正しい音を挿入し、Y に正しい練習番号を示唆している。20 行目で Va2 が間違っただ所を示していたことが分かり訂正を行う。

これに対して、Y は理解した旨を述べるが、B ではなく D と発言している。しかし、Va2 が楽譜を指し示せたこと、22 行目の Y の発言で開始場所は分かっていると推測されることから、曖昧さを残したまま会話が終了している (23 行目)。25 行目で念押しの為に C2 は Y の楽譜の該当場所を音名で指示している。

断片 1、2 のような確認のための会話は一日の練習のなかで何度も行われている。Y は何

度も確認を行う権利を、C2はそれに応答する義務を有している。Yの確認のための発話は、不自然さを含み理解されづらいことがある。しかし、それを指揮者C2は理解されやすいように口頭で修正したり体面を保つための配慮をしたりしている。C2が口頭で対処しきれないときは、Yの周囲の演奏者が対処をしている。このような確認と修正の対処により不適切性の非トラブル化が行われる。Yの周囲の団員が補完し非トラブル化することによって確認要求の完全化が行われるともいえる。確認連鎖の長いやり取りが相互行為をYのサポートに見せている。

4-3 トラブルの認知

4-3-1 新しい楽譜とルーティーン

4-2では、Yが周囲に対して確認を求める場面について見た。Y自身が確認を要求したときは、周囲の人が随時対処するというのは団員の共有された知識である。本項ではY自身が自覚していないトラブルの場面を分析する。

断片1'は、新しい楽譜をYが取っていない場面である。ここでは、皆が自主的に楽譜を取って席につくということをそれぞれの義務として理解しあっている。これは編曲者C3が来場して新しい楽譜が配布されるときルーティーンを背景にした知識である。C3は練習開始時間である午後1時より前に到着し、長机に新しい楽譜をパートごとに置いた。Yは、大半の演奏者が長机から楽譜を取っていた時分を過ぎて練習場所に到着した。Yは到着して直ぐ荷物を置きコンビニに去っていった。そして、練習開始直前に練習場所に戻り、楽器の準備を行い着席した。したがって、Yは楽譜を取ることに気づく機会が無かった。約2時間後Yは別の版の楽譜を譜面台に置いた。別の版は過去に合奏したことのあるオーケストラ版の楽譜

であり、新しい楽譜は同一の曲であるがリコーダーとの協奏のためにC3が編曲したものである。一人だけ異なる種類の楽譜をセットしているYは皆が新しい楽譜を持っている状態の中に参加していない。

本事例では、周囲の奏者が複数参加してYを援助できる状態にすることが行われた。楽譜トラブルは、皆で同じ曲を同じタイミングで演奏するオーケストラでは、解決されるべき問題とされる。なお、断片1'は断片1に連続している。人物の位置関係は図2のようになっている。

4-3-2 トラブルと認知連鎖

ここでは、断片1'の分析を行う。特に断片1'ではVaの働きかけが大きくVaの視線に着目することでより理解がし易くなる。そこで、Vaの視線に着目して記述してゆきたい。Vaは断片1'の間、図3のように何度もYに注意を向けている。すなわち、隣にVa2が着席して視界を遮っているため、少し腰を浮かせのぞき込むような姿勢でYの方を見ている。

視線1は断片1'にVaの視線と動作を加筆したものである。「Y」は、図3のようにしてVaがYの方を見ていることを表す。「y」は、Yの方を見ようとしているが完全にはYの方を向ききっていないことを表す。

Vaは、6行目でYが「さんぽ」という曲名を確認したときからYへ注意を向けていた。7行目で一旦会話が終了し、Yは曲名以外の要求はないことが示唆される。この様子をVaは見えていた(6行目)。そこで、Vaが8行目で「持っていないと思う」と発言し問題提起を行っている。4-3-1で述べた状況をVaは練習開始前から見ており、8行目ではYがアルト・リコーダーとの協奏用の新しい楽譜ではなく、オーケストラ用の楽譜しか持っていないという直接経験的な事実が述べられている。このときVaは

表3: 【断片1´】 C2は指揮者、C3は編曲者・指揮者、YとVn2-2は第二バイオリン奏者、Vaはビオラ奏者

06	Y:	さんぽですね, [はい]
07	C2:	[はい]
08	Va:	° 持ってないと思う. 持ってないと思うな°
09	C3:	((長机の楽譜を取りに向かう))
10	C2:	持ってないと思いますよ:hh[パターンのに. 持ってらっしゃらないと思うので取ってくださいね
11	Y:	[たん(.) たん(.) た:↑:ん(.) たん(.) たん(.) た::ん
12	C3:	Yさん(.)ありますか?
13	Y:	あり [ます:]
14	Va:	[あの: オケの楽譜 [しかな [い= ((C2とC3の方向に発話))
15	C2:	[ある ((驚いた表情で))
16	Vn2-2:	[リコーダーって [かいてあるやつやで
17	C2:	=Hnn? = ((Vaに対して発話))
18	Va:	[オケの楽譜しかな [い.
19	Y:	[リコーダー
20		[のやつありませんでした
21	Va:	[リコーダー° のやつはない°
22	C2:	ですよ
23	C3:	¥ああ¥(.)要するに, ないんですね
24	Y:	[[はい
25	Va:	[[° はい°
26	C3:	((楽譜を持ってYの方に歩き出す))



図2: 人物の位置関係

2度 Yの様子を見ている。

この Vaの発話が起点となりサポート連鎖が生まれている。Vaの発話を聞いた直後 C3は長机に Yの楽譜を取りに行く(9行目)。また、Vaの発話を受けて、この場で一番発言権のある C2が「持ってないと思いますよ」と Vaの発言を援用し同盟している(10行目)。「パター

的」にという言葉を使用することで C2のオリジナルな証拠の呈示無しで、C2の発言を正当付けようとしている。C2は、Yに楽譜を取るよう依頼する。しかし、Yは自分の楽譜の束に注意を向けつつ、「さんぽ」のメロディーを歌っており C2の発話を聞いている様子はない(11行目)。C3があらためて会話に入って

表 4: 【視線 1】

		yyYYY	
06	Y:	さんぽですね, [はい	
07	C2:	[はい	
		YYYyyy	yyyYYYYYY
08	Va:	° 持ってないと思う. 持ってないと思うな°	
09	C3:	((長機の楽譜を取りに向かう))	
		YYYYYYYYYyyy	yyyYYYYYYYYYy
10	C2:	持ってないと思いますよ:hh[パターンの. 持ってらっしゃらないと思うので取ってくださいね	
11	Y:	[たん (.) たん (.) た: ↑: ん (.) たん (.) たん (.) た: : ん	
		yYYy	
12	C3:	Yさん(.)ありますか?	
((中略))			
20		[のやつありませんでした	
21	Va:	[リコーダー° のやつはない° ((C2に向かって発話))	
22	C2:	ですよ	
23	C3:	¥ああ¥(.)要するに, ないんですね	} ((Va が楽譜を見ながら 4 回頷く))
24	Y:	[はい	
25	Va:	[° はい°	

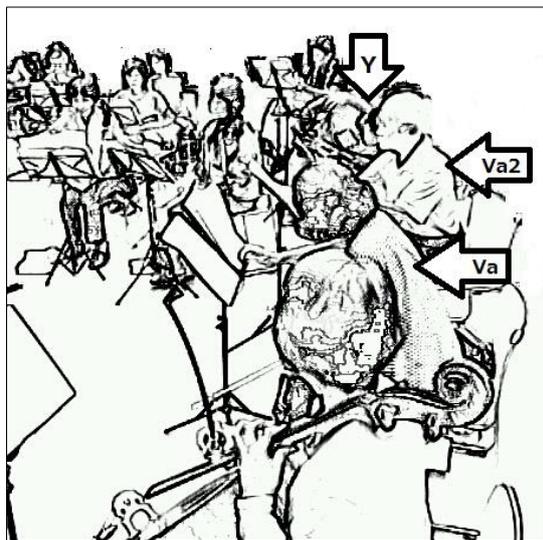


図 3: 人物の位置関係

いない Y に呼びかけ楽譜の有無を訊ねる (12 行目)。この発話は Y のために長機の楽譜を取りかけたまま発話されており「無い」という返答を予期している。

しかし、C3 は Y から楽譜があるとの回答を得る (13 行目)。Y は楽譜を確認するなどの対処無しに即座に発話している。この回答の不適切性が共有され、14 行目と 18 行目では Va が、15 行目では C2 が、16 行目では Vn2-2 が相次いで修正を促す発話する。Va、C2、Vn2-2 は、それぞれのやり方で Y から適切な回答を得ようとしている。Va は、Y がオーケストラ版の楽譜「しか」持っていないという状態を述べている。これは Y の発言を受けてそのまま合奏を開始することを防止するため、進行を決定する権限を有する C2 に向かってなされている。Va と C2 が Y は楽譜を持っていないことを前提にして発言しているのに対して、Vn2-2 は「リコーダーの」楽譜であるかどうかを確認するよう強調している (16 行目)。

すると、遂に Vn2-2 の「リコーダー」(16 行目) という情報が Y に取り入れられて「リコーダーのやつありませんでした」(19 行目・20 行

表 5: 断片 1´ における集合的行為

6-7 行目	Va	曲名以外に要求がないことを確認
8 行目	Va	問題提起
9 行目	C2	楽譜を取るよう依頼 (Y は聞いていない=失敗)
11 行目	C3	「楽譜が無い」という回答を前提とした質問、動作
12 行目	Y	有ると回答 (不適切)
13 行目, 18 行目	Va	合奏が開始することを阻止する発言
15-16 行目	C2, Vn2-2	Y への修正催促
19 行目	Y	トラブルの認知発話
21 行目	Va	Y の発言を引き出すための発話をフェードアウトさせる
22-25 行目	Va, C2, C3	Y の発言の安定性を高める
26 行目	C3	Y に楽譜を渡しに行く

目)という適切な回答が達成される。この Y の発話は、21 行目から 25 行目の連鎖を引き起こしている。19 行目、20 行目の Y の発話に気付いて Va は Y から適切な発話を引き出すための発話をフェードアウトさせている (21 行目)。22 行目の C2 の発話は、直前の Y の発話の適切性を基底にしている。また、24 行目の Y の回答の安定性を高めるために C3 の質問に対しては小さい声で「はい」と Y の発話と重なるような形で発話している (25 行目)。22 行目から 25 行目では、Va が 4 回頷き Y の回答の適切さが確認されている。21 行目から 25 行目の連鎖は、現在の秩序を安定的にする作用がある。6 行目から 26 行目までをまとめると、表 5 のようになる。

以上のように、オーケストラ α の団員はそれぞれのやり方で援助して Y から適切な発話を引き出している。Y 自身が自覚していないトラブルの場合、周囲の団員と Y の間で食い違いが生じ、周囲の奏者が集団的に Y にトラブルの認知発話を促している。最終的にオーケストラ α では、Y 自身によって楽譜の非所持が確認されることでトラブルが処理され援助可能な状態になった。この状態が作り出されてから C3

は楽譜を持って Y の方に歩き出す (26 行目)。「リコーダーのやつありませんでした」という回答は、Y と周囲とが整合的な参与の形態を得るための発話である。Y が楽譜は「あります」(13 行目)と言う状態より「ありませんでした」(18 行目)と言う状態がより整合的な状態として作り出されているといえる。皆が新しい楽譜を取るという状況への参与の欠陥を周囲の団員が補償するためには、Y の参与が必要とされている。

4-4 問題解明と楽譜の要求

4-4-1 強力なトラブルの認知連鎖

本項では、Y への働きかけが多くの人によって行われている別の事例を見る。この事例は、4-3 と類似した相互行為であるが異なる結果が生じた。断片 2´ も指揮者と複数の団員が協力して Y に楽譜が必要であるという発言を引き出そうとする場面である。この場面では、楽譜のバージョンが異なることが分かり、複雑な連鎖が起こる。断片 2´ は断片 2 と連続している。

Y は、29 行目で楽譜を見ながら練習番号 B が見当たらないことについて状況理解の発話を

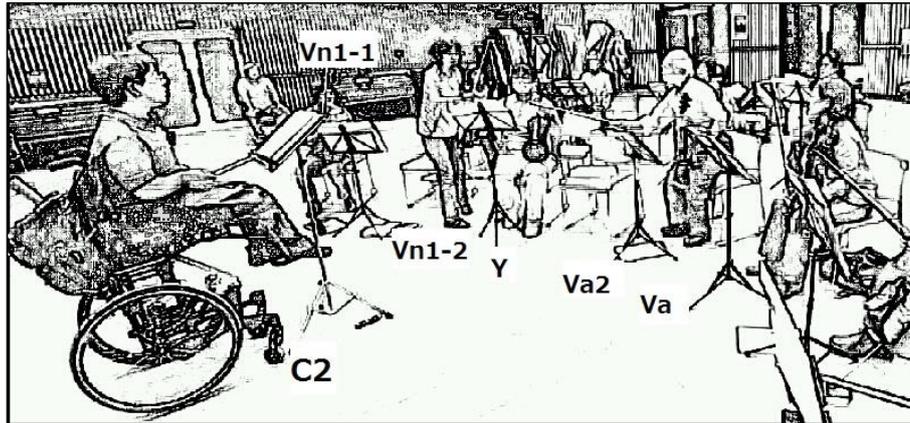


図 4: 人物の位置関係

行う。すると、Vn1-2 が Y の楽譜に練習番号 B が無いことを確認する (30 行目)。練習番号 B が無いという情報が共有されたのを契機として、32 行目ではその場を取り仕切る権限のある指揮者 C2 によって「B が無い」という問題の設定がなされる。また、31 行目・33 行目で練習番号 B が無いことの原因を Va が探索している。これを受けて、Y の楽譜を見ながら Va2 が練習番号 B の不存在を否定する (34 行目)。これは断片 2 で Va2 が Y の楽譜を確認し該当場所を指摘できたことに由来する。なお、暫定版では練習番号 D の箇所が確定版では練習番号 B と記されている。すると、Va2 と Vn1-2 は、曲名の右横に「(仮)」と記されてあるのを発見し、トラブルの原因が明らかになったことをアナウンスする (35 行目、36 行目)。「(仮)」の楽譜は暫定版であり、合奏開始の該当場所はあったが練習番号は異なるものが付されていた。Va2 は、この暫定版の楽譜は使用できないという評価をする (37 行目)。39・41 行目では、C2 によって暫定版を使用していたことへの評価が延べられる。40 行目では Vn1-2 が、練習番号が無いという問題から楽譜を貰って

ないという問題へ問題転換させる。これらのやり取りを見聞きして即座に Vn1-1 は問題解決のため楽譜を取りに向かう (42 行目)。

しかし、Y は Vn1-2 の発言を受けて、楽譜が異なる理由を貰っていないのではなく「前のと間違ごうて持ってきた」からであると自分で説明している (43 行目)。これに対し、C2 は Y の発言を修正し暫定版の楽譜をしまうようにアドバイスしている (44 行目)。

Y はこの C2 のアドバイスを拒否する (45 行目)。「これでいきますわ我慢して」(45 行目) というのは暫定版の楽譜を譜面台に置いたまま暗譜で演奏するという主張である。Y は初見のもの以外は、楽譜を記憶して演奏している。確定版と暫定版の違いは練習番号がずれるという部分的なものである。これは、断片 2、2' の直前に通し練習で Y が暫定版で間違いもなく合奏できていたこと、そして、断片 2 で Y が練習番号 B が無いと指摘したときに、その該当箇所を Va2 は指すことができていること、C2 とともに音符の確認を行い合意が済んでいることから明らかである。Y の発言は、参与をしたいという意思とその手段の表明である。

表 6: 【断片 2´】 C2 は指揮、Vn1-2 は第一バイオリン奏者、Y は第二バイオリン奏者、Va と Va2 はビオラ奏者

28		(0.4)
29	Y:	これ D しか° な (いかな°)
30	Vn1-2:	B が無いですね ((Y の楽譜を見ながら))
31	Va:	あ, [楽譜が違うん (.) =
32	C2:	[B が無い
33	Va:	= [ではないんかな, ではない?
34	Va2:	[え? あるで ((Y の楽譜を見る))
35	Va2:	[[仮や
36	Vn1-2:	[[あ (.) 仮や, これ
37	Va2:	これだめ,
38	Va:	仮
39	C2:	お: :, [頑張っって違う方の楽譜弾いてたんですか. そりゃ>ひ・ひとつも合わない=
40	Vn1-2:	[もらってへんか. は↑: ↓: : : :
41	C2:	=じゃないですか大丈夫ですか< hah hah hah. はい hah hah hah hah
42	Vn1-1:	((40 行目を聞いて立ち上がり, 新しい楽譜を取りに事務部の方に走り出す))
43	Y:	前のと間違ごうて持ってきたんちゃうかな私,
44	C2:	も, 入れとき [ましようね (.) それはね
45	Y:	[もこれでーこれでいきますわ我慢して
46		(0.2)
47	C2:	い(h)や(h)い(h)や、そ(h)う(h)い(h)う(h) 我慢の問題ではないので 我慢=
48		((複数の笑い声と発話の重なり))
49	C2:	= 我慢してもちょっとあかんものはあかんのですわ 我慢. (0.6) はい.
50	Y:	いえー家に置いてるかも [しれない
51	Vn1-2:	[あわへんーあわへんのよ
52	Y:	家に置いてた [かもしれない確か. 間違っって持ってきたかも.
53	Va:	[もうそれかえー返しときましようか, ((楽器を置きながら))
54	Va2:	そうね, だぶっっちゃうね
55	Va:	[だぶっちゃうので
56	Y:	間違っ [て
57	Vn1-2:	[この間の練習で: :, 配っててん [やんか:
58	Y:	[あ: 家に置いて [て
59	C2:	[前の練習いらしてない
60	Va:	あ: : お休み
61	Y:	いつーいつの, あー9月23日ですね?
62	Vn1-2:	ですよね:
63	Y:	23日あーやすー先生ーそい
64		((右手を挙げながら)) わかりました先生 23日休みー休んでました:
65		[[そのこと
66	C2:	[[は: : い. ちゃんと覚えてます, は: い
67	Y:	それで変えた方がいいなとおもてます楽譜. [[お願いします.
68	C2:	[[はい. ちょっと待ってくださいね.
69		今楽譜用意してますからね.

これに対して、指揮者 C2 が、「我慢の問題ではない」(47 行目)、「我慢してもあかんものはあかん」(49 行目) と返答し Y の主張を強く却下している。これは Y がそのような努力する必要はないという主張でもある。Y の「我慢」という言葉に引きずられた影響もあるが、すぐに完全な楽譜を用意できるため、暫定版を使う

必要はないという主張が行われている。

しかし、Y は確定版が家にある可能性を指摘し C2 のアドバイスを拒否する (50 行目)。こうした Y の主張を聞き、51 行目で Vn1-2 が旧版の楽譜ではいけない理由を述べ修正を促している。しかし、確定版の楽譜は不要であるという主張が Y によって再びなされている (52

表 7: 断片 2´ における集合的行為

29 行目	Y	解決の提案
30 行目	Vn2-2	楽譜の不備を確認
32 行目	C2	不備が問題として設定される
31,33-34 行目	Va,Va2,Vn1-2	不備の原因を探す
35-36,39,41 行目	Va2,Vn1-2,Va,C2	原因解明 (暫定版である)、評価
40 行目	Vn1-2	問題の転換 (貰っていない)
42 行目	Vn1-1	事務部に楽譜を取りに行く
43 行目	Y	楽譜が異なっていた理由説明 (自宅にある)
44 行目	C2	修正、アドバイス
45 行目	Y	アドバイス拒否、参加意志と手段の表明 (楽譜は不要)
47-49 行目	C2	強い却下
35 行目	Y	拒否と理由 (自宅にある)
36 行目	Vn1-2	修正を促す
37 行目	Y	拒否と理由 (自宅にある)
53-55 行目	Va, Va2	アドバイス
56 行目	Y	拒否と理由 (自宅にある)
57 行目	Vn1-2	ヒントを提供、修正を促す
58 行目	Y	拒否と理由を言いかける (自宅にある)
59 行目	C2	トラブルの原因の新たな解明
61-62 行目	Y, C2	前回の練習日の確認
64 行目	Y	楽譜が無い理由をアナウンス (トラブル認知発話)
67 行目	Y	楽譜の要求

行目)。この様子を見て、Va2 が Y の譜面台にある暫定版の楽譜を事務部に返却しておくようアドバイスし、Va がそれに同調する (53-55 行目)。

Y は続けて 56 行目で確定版の楽譜が不要であるという主張をしようとする。この Y の発話を遮って Vn1-2 が、確定版の楽譜が必要である根拠について「この間の練習」とヒントを言いかける (57 行目)。これは発言の修正を促し、Y から適切な発言を引き出す発話である。「で」と「か」が長く引き伸ばされ、Vn1-2 は Y の発言を待っている。しかし、Y は 58 行目で再び確定版の楽譜が不要である旨を主張しようとする。そこで、C2 によって Y が前回の練習に来ていないことが指摘される (59 行目)。ここでは、トラブルの原因が新たに解明されてい

る。そして、Y は 61 行目で前回の練習の日付の確認をし、63 行目から 64 行目で楽譜が無い理由を自分でアナウンスしている。67 行目でアドバイスの受容、解決手段として楽譜の要求がなされる。29 行目から 67 行目までをまとめると表 7 のようになる。

断片 2´ ではトラブルの基盤が、同一と想定される楽譜が確認できないことから、楽譜の渡し忘れというミスに変化している。前者は障害関連的であるが、後者は物レベルの日常的なトラブルである。全員が所有していると想定される楽譜は、演奏行為の基盤となるものである。楽譜の手渡しミスという日常的トラブルの解決がなされている途中で、Y が解決方法を提示する。この、暫定版の楽譜を置いて記憶をたどって弾くという解決法は、団員メンバーに想定さ

れておらず、障害関連的な提案となっている。そしてこの Y の発言を修正するための連鎖が集団的に行われている。

Y の障害関連的な発言を起点とした連鎖は断片 1´ と同様である。Y が「楽譜お願いします」という発言をすること自体が、Y をサポートするための集合的行為への参加となり、サポート連鎖の達成となっている。ただし、この事例は Y から適切な発言を引き出すための集合的行為が強力になされている点で断片 1´ とは異なる。

4-4-2 楽譜トラブルとオーケストラ参加

断片 2 の段階では共有されている問題は障害関連的であった。断片 2 では同一であるはずの楽譜で練習番号が確認できないという日常的トラブルの解決が目指される。指示された練習番号や小節番号が見つからないというのは、Y に限らずよく起きるトラブルである。この場合、該当箇所を小声で教え合ったり弓先で指したりする。しかし、断片 2 では何度も確認が行われており障害関連的なものとなっている。Y に楽譜がどのように見えているのかの評価は C2 にはできない。Va2 が該当場所を指し示していること、Y が「わかりました」と発言していることを受けて C2 は「D に聞こえるけど大丈夫かな」と修正を促しつつも解決が不完全なまま会話が終了している。このときは、Y の譜面台の楽譜は確定版であることが前提となっていた。

断片 2´ では、トラブルの原因が障害に関連するものではなく、Y に楽譜を渡していないというルーティーンの欠陥であることが明らかとなった。そこで集団的機能を果たすための相互行為が生じている。この途中で Y から暫定版の楽譜を譜面台に置いたまま記憶により合奏するという解決方法の提案がなされた。この提案は却下されている。

前述のように、Y の楽譜への接し方は周囲の人と差異があり⁽⁹⁾、普段から暗譜をして楽譜を見ずに合奏に参加している。Y が練習中に暗譜していないから弾けないという宣言したり、楽譜を確認しながら弾いていると指揮者に珍しさを指摘されたり、暗譜について周囲の団員に見事であると評されたりすることがある。このように Y が暗譜して楽譜を見ずに合奏しているということは団員に共有されている知識である。断片 2、2´ の直前に行われた通しの練習では、Y は暫定版の暗譜により合奏も成功している。しかし、Y の楽譜が暫定版であることが分かった後、「ひとつも合わない」(断片 2´ の 39 行目)、「あわへん、あわへんのよ」(断片 2´ の 51 行目) と音を合わせることへの志向を理由に、Y の主張が拒否されている。ここには、Y だけが異なるバージョンの楽譜を持つ余地は無い。これは以下の状況的背景による。

第一に、断片 2´ では予備の楽譜がありすぐに楽譜が用意できる状況であった。楽譜を貰っていない団員は新しい楽譜を要求する。すぐに用意できない場合はコピーがされる。また、楽譜を忘れた団員は隣の人に頼んで楽譜を共有したり、予備の楽譜を借りたりすることが普段から行われている。これらの方法で、それぞれの団員の目の前に同じバージョンのパート譜がある状態が守られている。楽譜は指示書であり、これに従うことが演奏であるというオーケストラ的規範が守られている。第二に、断片 2´ において確認連鎖がスムーズに進まなかった。Y は暫定版では合奏開始の場所を指示された場合確認することはできないが、合奏開始後に音を聞いてから入るなど工夫次第で参加可能である。Y は合奏開始後に居眠りから目覚めたときなどはこのような工夫をして参加している。しかし、断片 2 の、「イーウィウィー E」(17 行目) や会話連鎖の冗長性からは、Y が工夫して

スムーズに参加できない可能性があることが示唆される。

こうした状況全体が影響して Y の主張は強く否定されている。楽譜の手渡しミスというトラブル処理の途中で行われた Y の主張は不適切とされ、Y 自身にこの不適切性の修正をさせるための強力な集団的行為が行われている。結果的には、Y によるトラブル認知発言と楽譜の要求がなされて当初の目的であった楽譜トラブルの処理が達成されている。

断片 1´ も断片 2´ も楽譜トラブルの解決に Y のトラブル認知発言を必要としている。Y がトラブル認知し楽譜の必要性を示唆したり楽譜を要求したりすること自体がオーケストラの練習への参加となっている。相互行為は実践的なトラブルの処理を目指しているのであり、Y の発言の不適切性を修正する活動はあくまでも付随的なものである。オーケストラの練習には合奏だけではなく楽譜トラブルも含まれ、実践的行為としてのオーケストラの練習が共同的に達成されている。こうした集団的方法には、オーケストラ α での日常規範の強さが顕在化している。

5 示唆と結論

本稿では、医療・福祉従事者が関与しない実践としてオーケストラ α での楽譜トラブルに着目し、相互行為の形式的分析と知識基盤の分析を行った。オーケストラ α において Y は、「パターンの」(断片 1´) という C2 の発言に示されるように、演奏は上手だが楽譜に困っている人である。そして、楽譜に困っていることへの対応は、Goode が言うように何がいつ行われるか、何がどこで行われるかといったルーティーンの共通理解によって基礎づけられている。

合奏開始時には Y が指揮者に確認を求める場合があることが知識として団員に共有されている。Y の確認のための発言は、不自然さを含み理解されづらいことがある。断片 1、2 では、Y の発言の不自然性、不適切性は、指揮者による質問への応答、修正、体面を保つ調整により非トラブル化されていた。確認を目的とする連鎖の中で適宜不適切性の非トラブル化が行われているという入れ子構造がシークエンスをサポートティブなものに見せている。

不適切性の修正は、Y が楽譜トラブルを自覚していない場合も行われている。断片 1´、2´ では、団員が Y に修正を促すことが集団的に行われていた。Schegloff の言葉を借りれば、周囲の人が修復の開始をし、Y が修復の操作を行っていると言える⁽¹⁰⁾。しかし、相互行為は楽譜トラブルの処理を目指しているものであり、Y の発言の不自然性、不適切性の修正は主要な関心ではない。Y が楽譜トラブル認知発言をし、楽譜を要求することでトラブルの処理が達成される。このこと自体がオーケストラの練習という共同行為を達成させるための参加である。ただし、楽譜トラブル処理のために断片 2´ でみたような強力な働きかけがなされる場合もあり、オーケストラ活動は参加促進と集団統制的な管理という二面性を有している。

メンバーが参照している知識は、日常実践の参与形式と本質的に同じであり、外的専門知識に基づく医療・福祉的知識とは異なるものである。ここには専門知識の非対称性を基礎にした支援のジレンマの問題は本質的に存在しない。専門家が関与しないオーケストラ α では、20 年間の実践的ルーティーンの知識こそが Y の参加に資するものとなっている。

しかし、知識基盤は日常的なものであるが、集団統制的な管理という方法は従来の専門職サポート論で言われてきたパターンリスティック

な側面を含んでいる。参加促進と集団統制的管理という二面性は、専門化が関与する場であってもなくても、起きうることでありこれまでの専門職サポート論においては等閑視されていたと言えるだろう。

オーケストラαは、市民オーケストラであり音楽を合奏するという目的志向的な団体であるが、練習時間のうち相当の時間をYとの相互行為に割いている。ここでは短時間でできるだけ効率的に練習を行うという一般的な市民オーケストラの秩序は後景化され、その中で持続可能な秩序を形成している。合奏練習を中止してこういったやり取りがオーケストラの中心でなされていたり、そのやり取りに参加したりすることは、Y以外の障害奏者だけでなく高齢奏者など多様な人の参加しやすさを確保するだろう。

ある団体が、障害者を包摂しているか排除しているかということは一元的には評価しえない。一つの団体であっても障害者が参加するときに様々な参加の次元を有しているからである。どのような状況でどのような相互行為のもと参加や排除の現象が現れているかを集団構造の中で地道に明らかにしてゆくことが必要だと考える。

注

- (1) 1915年、Flexnerは、現段階ではソーシャルワーカーは専門職ではないと結論付けた(Flexner 1915)。1957年にGreenwoodは「専門職の属性」を発表し、ソーシャルワークは既に専門職であると結論付けている(Greenwood 1957)。ソーシャルワーカーの専門職性については現在でも議論が分かれる。
- (2) 具体的には、①自律尊重の原則、②無危害の原則、③恩恵原則、④公平正義原則である(Beauchamp & Childress 1979=1997)。
- (3) 具体的には、①個別化の原則、②意図的な感情表現の原則、③統制された情緒関与の原則、④受容の原則、⑤非審判的態度の原則、⑥自己決定の原則、⑦秘密保持の原則である(Biestek 1957=2006)。

- (4) エキストラを除く入団者、在団者に聞き取りをした。
- (5) Yは弱視である。合奏では、楽譜を暗記し演奏している。練習番号を確認したり初見の楽譜を弾いたりする必要のある際には楽譜を見る。楽譜を見るためには、目を楽譜から5cmほどの距離まで近づける。なお、オーケストラαでは、譜面台は1人1台の使用である。団員の会話上でYの音程が良い、上手であるという評価が度々聞かれた。そして、日本の著名な指揮者が設立した障害のある団員がいるオーケストラのメンバーに選出されていることやYの記事が新聞に掲載されたことなどが、オーケストラαの昼食時に話題として共有されている(2014年12月23日のコンサート後の昼食時間)。しかし、セカンドバイオリン奏者がY以外全員欠席のとき、指揮者から他のパートの音を聞くよう注意を受けることがある。最近はこのような場合、ファーストバイオリン奏者が一名セカンドバイオリンのパートをYの横で弾くことになっている。これらの会話や実践は、Yがオーケストラαの中で単独での演奏は上手いが他人の音に合わせるのには苦手な人という一つの地位をもつ存在であることを示している。

- (6) 2014年8月24日14:06に撮影。
- (7) 会話分析記号「[]」は会話の重なり、「[[]」は同時的な発話開始、「=」は二つの発話が途切れなく密着していること、「(x. y)」は音声途絶えている秒数、「(.)」は短い間合い、「.」は発話完了のような音下がりの区切り、「,」は音の区切り、「?」は語尾の音が上がり発話完了のような音調、「↑↓」は音調の上下、「> <」はスピードの低下「:」は音声の引き延ばし、「-」は言葉の途切れ、「h」は呼気音、「(h)」は笑いながらの発話、「¥ ¥」は笑い声での発話、「下線」は強い音、「*斜体*」は音が大きいこと、「° °」は音が小さいこと、「()」は不明確な聞き取り、「(())」は注記。
- (8) 2014年10月5日14:35に撮影。
- (9) 視覚障害者の歩行練習を分析した吉村ら(2016)は、視覚障害者と歩行訓練士の空間把握に関する差異、お互いの知識の利用について相互行為的に記述している。
- (10) Schegloffら(1977, 1992, 1997)の分析によれば会話の修復は修復の開始と修復の操作という別の作業で構成されている。例えば、Yが聴こえなかった発話を聞き返すのは修復の開始で、それに対する指揮者C2の返答は修復の操作である。シュエグロフの分析によれば、トラブル源を含む発言をした人

自身が修復を開始する自己修復が優先される。他者が修復を開始する場合も、他者は何がトラブルかを示唆するだけで、修復の操作をあまり行わない。他者によって修復が開始され修復の操作がなされる他者修復は、教育場面や診察場面のようにはあらかじめ知識に対する権利が非対称に配分されているときなど特別な場合であるとされている (Sacks et al. 1974=2012 ; Schegloff 1977, 1992, 1997 ; 前田ほか 2009)。

文献

- Beauchamp, T. L. and Childress, J. F., 1979, *Principles of Biomedical Ethics*, New York: Oxford University Press. (=1997、安永幸正・立木教夫訳『生命医学倫理』成文堂.)
- Biestek, F., 1957, *The Casework Relationship*, Loyola University Press. (=2006、尾崎新・福田俊子・原田和幸訳『ケースワークの原則：援助関係を形成する技法』誠信書房)
- Flexner, A., 1915, "Is Social Work a Profession?" *Paper presented at Proceedings of the National Conference on Charities and Correction.*
- Freidson, E., 1970, *Professional Dominance : The Social Structure of Medical Care*, Atherton Press, Inc. (=1992、進藤雄三・宝月誠訳『医療と専門家支配』恒星社厚生閣)
- Garfinkel, H., 1967, *Studies in Ethnomethodology*, Cambridge: Polity Press.
- Goode, D., 1990, "On Understanding without Words: Communication between a Deaf-blind and parents" , *Human Studies*, 13: 1-37.
- , 1994, *A Word without Words: The Social Construction of Children Born Deaf and Blind* , Philadelphia: Temple University Press.
- Greenwood, E., 1957, "Attributes of a Profession" , *Social Work*, 2 (3): 44-55.
- Harnoncourt, N., 1984, *Der Musikalische Dialog*, Residenz Salzburg (=2006、那須田務・本多優之訳『音楽は対話である』アカデミア・ミュージック)
- Lubert, A., 2011, *Music, Disability and Society*, Philadelphia: Temple University Press.
- 前田泰樹・水川喜文・岡田光弘編, 2009, 『エスノメソドロジー——人々の実践から学ぶ』, 新曜社.
- Sacks, H., Schegloff, A. and Jefferson, G., 1974, A simplest systematics for the organization of turn-taking for conversation, *Language*, 50(4): 696-735 (=2012「西阪仰訳『会話分析基本論集』世界思想社.)
- Schegloff, E.A., Jefferson, G. and Sacks, H., 1977, "The preference for self-correction in the organization of repair in conversation" , *Language*, 53(2): 361-82.
- Schegloff, E.A., 1992., "Repair After Next Turn: The Last Structurally Provided Defense of Inter-subjectivity in Conversation" , *American Journal of Sociology*, 98: 1295-345
- , 1997, "Third Turn Repair" , G.R.Guy et al. eds., *Towards a social Science of Language: Papers in Honor of William Labov, Volume2: Social Interaction and Discourse Structures*, 31-40

社会福祉法人 若狭つくし会, 2011, 『障害者の社会参加活動の支援に関する調査』平成 23 年度厚生労働省障害者総合福祉推進事業.

杉野聖子, 2009, 「障害のある人の余暇活動の保障とその支援における現代的課題——教育と福祉の連携について」『日本体育大学紀要』39(1): 59-70

吉村雅樹・秋谷直矩・佐藤貴宣, 2016, 「歩行訓練における地図習得のプロセス——視覚障害者歩行訓練のエスノメソドロジー」『ソシオロゴス』40: 133-55

(まさい さち、大阪大学大学院、sachi.masai@gmail.com)

(査読者、檜田美雄、檜村志郎)

Participation of Orchestral Player with Disability Focusing on the Situation with no Support of Medical and Welfare Workers

MASAI Sachi

When person with disabilities participate in the society, those who have some sort of medical and welfare skills often support them. A lot of research on such places has been accumulated until now. In this paper, I clarify how disabilities participate in the situation that does not involve medical or welfare workers and does not aim for support. I focused on α orchestra in which disabled players participated for 20 years. And I analyzed the forms and knowledges of interaction about musical score problem. Then knowledge of practical routine that group members collectively used to ensure participation of disabled players became clear.